

胃部X線検査所見と生活習慣との関連性

一般財団法人 近畿健康管理センター

○石井 美有、後藤 雄太、近藤 志麻、奥 成子、一瀬 葉子

【目的】

今回、胃部X線検査・ピロリ抗体検査を実施した受診者を対象に生活習慣を調査し、胃の所見との関連性について検討したのでここに報告する。

本演題の内容に関して、共同演者を含め開示すべき利益相反に該当する項目はない。

【対象および方法】

当施設にて、2018年4月1日から2020年3月31日までの2年間に胃部X線検査とピロリ抗体検査の両方を受診した1,240名（男性1012名、女性228名）を、ピロリ菌陽性群・陰性群に分け、それぞれの集団において胃の所見と生活習慣（喫煙・飲酒）の関連について分析を行った。統計解析はカイ二乗検定を用い、有意水準は5%に設定した。胃底腺ポリープや憩室の所見は正常として扱った。

【結果】

ピロリ菌陽性率は、全体で25.0%（男性26.7%、女性19.7%）。年代別感染率は20代（1/6）16%、30代（35/188）18.6%、40代（113/483）23.4%、50代（100/372）26.9%、60代（60/173）34.7%、70代（6/16）37.5%、80代（0/2）0.0%の結果であった。80代は受診人数が極端に少なかったこともあり陽性者は0名であったが、年齢の上昇とともにピロリ菌感染率も上昇していた。ピロリ菌陰性群の胃有所見率は6.2%（男性6.1%、女性6.7%）、陽性群では45.1%（男性47.2% 女性35.0%）で、陽性群で有意に胃の有所見率が高かった。

男性では、ピロリ菌陰性群の非喫煙者（B. I. =0）において平均より3.29人有所見者数が少なく、喫煙者（B. I. =400以上）において平均より4.88人有所見者数が増える結果を示した（ $P < 0.001$ ）。

女性では、ピロリ菌陽性群にてほとんどお酒を飲まない場合は平均より5.37人正常群が多く、ほぼ毎日飲酒する場合は平均より5.83人正常群が少なくなる結果を示した。また、ピロリ菌陰性群においても、ほとんどお酒を飲まない場合は平均より3.74人正常群が多く、ほぼ毎日飲酒する場合は平均より2.17人正常群が少なくなる結果を示した（ $P < 0.01$ ）。

不眠・不安・ストレス症状などの自覚症状の有無についても検討を進めたが、ピロリ菌陰性群・陽性群ともに胃部有所見者数に有意な差はみられなかった。

また、今回ピロリ抗体未検査群についても同様の検討を行ったところ、重喫煙者（B. I. =400以上）で有意に有所見者数が高く、毎日飲酒をする場合も有所見者数が高い結果となった（ $P < 0.001$ ）。

【まとめ】

今回の調査から、ピロリ菌陰性群においては、男性では喫煙指数が高いほど、女性では飲酒量が多いほど胃の有所見者数が有意に上昇することが分かった。これより、過度の喫煙・飲酒は胃の疾病発症に関与する可能性が示唆された。今回検討した胃の所見内訳は、ほとんどが慢性胃炎に関わる所見であり、有所見者のほぼ全てが広い意味で胃がん予備軍とした場合、胃がん予防対策として、除菌に加えて自身でできる健康習慣の実践も有用であると考えられる。問診の生活習慣を参考に、お客様に胃部X線検査の受診勧奨や生活改善を提案し、健康増進に役立てる。今後も新たな疾病リスク因子発見につなが

る調査・分析・情報共有を継続していきたい。

第 51 回 滋賀県公衆衛生学会（2021 年 2 月）にて発表